

あすりーと高岡

第23号



柔の形

平成16年
新春武道稽古始め



巻わら射礼

負ける練習から

御高岡市体育協会 副会長 塩谷 雄一



早いもので、柔道に関わりをもつようになってもう四十年余りになります。

受身

柔道の基本は受身
受身とはころぶ練習
まける練習
人の前にぶざまに恥をさらす稽古
受身が身につけば達人
まけることの尊さがわかるから
みつを

前半の二十年は、中学・高校・大学・社会人の現役選手として色々な大会に出場し、勝ったり負けたりと、当時は本当に厳しい練習の明け暮れでしたが、今になって思い出すとともに楽しい選手生活でもありました。全国各地を試合や合宿などで訪れることができたお陰で、たくさんの方の懐かしい思い出や友人たちをつくることができました。

そして、後半の二十年余りは地元・柔道連盟に所属し、チームづくりや選手の強化・育成、また審判などでも携わり、地元で開催された記念すべき二〇〇〇年とやま国体でも全力を傾注することができました。

柔道には負ける練習、すなわち受身の練習からはじめなければならぬ競技です。

私が個人的にも大好きな「相田みつを」さんの『受身』という次の一節があります。

相田さんご自身が柔道経験者かどうかは知りませんが、柔道の何たるかを簡潔明瞭に言い当てる表現だと共感させられています。柔道が今のように世界中に普及してきた理由は、ただ単に競技としての魅力だけではなく、創始者嘉納治五郎師範の柔道修行における究極の目的である「己の完成」「世の保益」という教育理念が世界の人々に受け入れられたことによるものといわれています。ひとりでも多くの子供たちに、このような魅力溢れる柔道をはじめてほしいものと切に願っています。



totoの収益は、身近に親しめるスポーツ環境の整備や競技力向上の事業に活かされます。

平成十五年度

体育協会研修会

体育功労者表彰式

平成十五年十二月六日(土)
会場 磯はなび

平成十五年度(高岡市体育協会役員研修会が行われた。

研修会にさきだち午後三時から平成十五年度第二回理事会が開催され、体育功労者(児童生徒全国大会上位入賞者)表彰、平成十六年度事業計画の基本方針などが審議された。

表彰式は加盟各団体からの役員を中心とした多数の列席者のもと、表彰状と記念の盾が宮崎副会長から児童生徒に手渡され、おわりに受賞者を代表して伏木中学の杉本 光くんよりお礼の言葉が述べられた。

引き続き行われた研修会は、講師に富山県教育委員会スポーツ課々長中沖克美氏を迎えて「富山県のスポーツの現状と将来」のテーマで講演がされた。

中沖氏は平成六年富山インターハイや平成十二年のとやま国体の県実行委員会会の担当者として大会成功のために尽力されており、それらの貴重な体験の中から、とくに中央関係団体の折衝の具体的活動などを紹介されるものにとりて誠に興味深い内容であった。

表彰式で表彰されたのは次の皆さんです。

平成十五年度
体育功労表彰者

(児童・生徒)

〈レスリング競技〉

越田 強太 戸出西部小学校
紺野 孝太 横田小学校
境 航 歌の森小学校
宮原 優 定塚小学校
西 光里 宮田小学校

〈相撲競技・新相撲〉

美濃 葵 古府小学校
小橋 夕香 伏木小学校

〈空手道競技〉

石王丸 拳成 野村小学校

〈フエシング競技〉

上野恵梨子 南星中学校
内尾 奈々 志貴野中学校
堀 美里 志貴野中学校
林 秀武 富山西高等学校

〈陸上競技〉

杉本 光 伏木中学校
荒幡 侑美 高岡工業高等学校

〈バドミントン競技〉

黒瀬 尊敏 高岡工業高等学校
玉澤 輝之 高岡工業高等学校

故 堺 三徳氏の思い出

前 富山県バドミントン協会 理事長 堺 三 徳 氏



堺理事長との出会いは、26年前の昭和53年にさかのぼり、富山県バドミントン協会の理事長、事務局長という役職についてからのことになりました。

自分自身も、バドミントン選手として過ごしてこられ、富山県のバドミントン界を日本のトップにのしあげて来られた一人であり、全日本実業団大会で10回の全国制覇をなし遂げた十条製紙伏木工場(現日本製紙伏木工場)の主力として活躍されるなど、その戦績においても素晴らしい実績を持つておられる方でした。「富山県でバドミントンをするのなら日本一しかないんだ」と常日頃から口に出され、そしてそれを実行され、現在の富山県バドミントン協会を築き上げて来られました。そして、平成2年には、トナミ運輸バドミントン部の創部に多大な尽力をされました。「2000年とやま国体」まで後10年という時でした。その後、平成4年に私が高岡市役所からトナミ運輸に移籍し、堺監督・今泉助監督という二人三脚の体制になり、堺さんは、チーム全体のマネージャーメントを私は現場というそれぞれの立場で、「日本一」を目差す事となりました。

更には、この年の広島国体、平成10年の神奈川国体とそれぞれ優勝し、いよいよ「2000年とやま国体」を迎える事となりました。

堺さんが、地元国体を見据え、三協アルミさんの絶大なご支援を戴き、平成2年から開催された富山県ジュニア選手権大会の初代チャンピオンが順調に育ち、少年男女のメンバーに選ばれ、成年男子はトナミ運輸、成年女子は三協アルミという万全の体制で臨みました。

その結果、天皇杯1位、皇后杯1位という素晴らしい成績を残す事が出来ました。このことは、10年という長い年月をかけ築いてこられた堺さんの行動力によりなし得たものと確信しております。

現在、トナミ運輸は幾多の全国大会で好成績を残し、更には海外へも選手を派遣出来るチームへと成長して来ました。

今後は、「富山県でバドミントンをするのなら日本一しかないんだ」と言っておられた堺さんの意志を受け継ぎ、昨今の厳しい経済事情の中でもチームを存続させて戴いている「オールトナミグループ」をはじめ応援して戴いている多くの方々に対し常に「感謝」の気持ちをお忘れず、バドミントン界における「トナミブランド」の確立に更なる精進を重ねて行かなければならないと考えております。

トナミ運輸バドミントン部

監督 今泉

勉



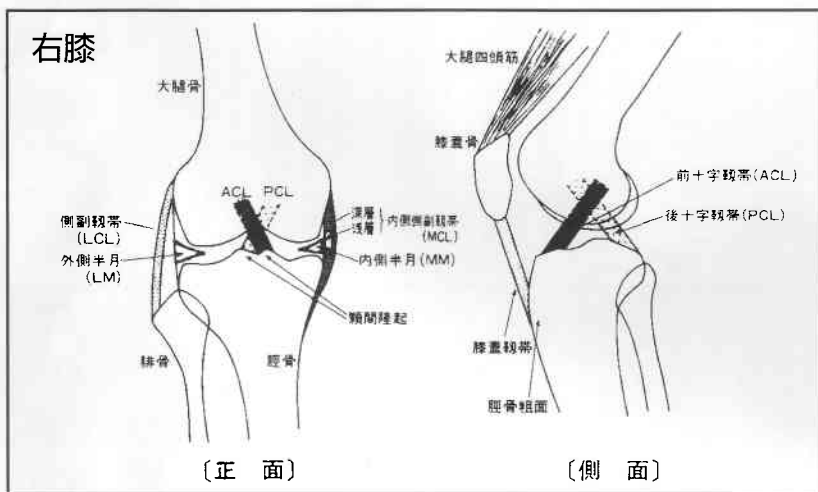
スポーツドクター・アドバイス

高岡市民病院 医療局長

整形外科 山田 均

膝前十字靱帯断裂について

最近の競技スポーツにおける体の動きは以前と比べ、より高速化し、複雑化してきております。この結果転倒、衝突、急な停止、方向転換時に膝に加わるエネルギーも増大化し、膝の靱帯損傷の頻度が増えてきています。膝を支える靱帯には内側と外側の側面にある側副靱帯と膝の中心を前後に走る前十字靱帯、後十字靱帯があります。この中で前十字靱帯は前方へのずれと捻れに対する安定性に関与しています。人との衝突、転倒、転落の際に膝に捻れの力が加わりやすいスキー、体操、柔道、サッカーなどで前十字靱帯断裂が高頻度で認められます。またバスケットボール、ハンドボール、バドミントン、バレーボールなど、すばいステップが要求される競技では、衝突などの外傷がなくとも自らの急激な動きで断裂してしまうことがあります。前十字靱帯を断裂しますと他の靱帯と異なり、手術をしなければ、元のスポーツ活動に復帰できません。またそのまま治療をせずに放置しておきますと時々膝がずれるため、当初問題なかった半月板や関節表面の軟骨も次第に傷ついてきてしまいます。発生頻度は男子選手より女子選手に多く、関節が柔らかい人に生じやすい傾向があります。断裂した直後は膝が激しくずれるため強い痛みと衝撃を感じますが、しばらくするとあまり痛みは感じなくなります。



このため、本人は靱帯まで断裂したとは意識しないことが多いようです。その結果受傷から医療機関への受診が長引き、診断や治療が遅れてしまうことがあります。この靱帯を断裂しますと90%は関節に血液がたまり、膝を捻ったような感じが、その後、膝が腫れてくるようであれば、関節内に血液が貯まっている可能性が高いと思われます。このような状況がありましたら出来るだけ早く医療機関を受診し、できればMRIや関節鏡検査などの精密検査を受けてください。

スポーツアングル

現在のスポーツ全般に対する年齢分布を考えてみると、低年齢者と中高年齢者が大半をしめその中間を占める人はごく一部のアスリートを除けば殆どと言っている。スポーツとは縁の無い世界に居るような気がいたします。

時代とともにクラブ組織の存続が危ぶまれる中、新たな動きが始まってきているのも事実で私が参加しているベストスキーアカデミー（全国組織）ではカリスマ性のある代表のもと、スタッフは一流、指導も一流となれば必ずと参加者は増えてゆきます。しかし、これもPR次第で手を抜けば直ぐに斜陽となるでしょう。

対象者は40歳以上に限定されていますが、平均年齢は65歳を超え高齢者と言った方が当てはまるでしょう。事実、生活に追われることなく悠悠自適の人たちが大半を占めていますが、その人たちには年齢を感じさせない青春があることです。テクニク、技術を追う姿は決してアスリート達に負けない積極性と老い（失礼）に打ち勝とうとする日頃の鍛錬で「このパワーはどこからくるのか？」と考えさせられ、その上自分に対するスポーツのありかた、今後のスポーツ組織の運営のありかたまでもご指導頂いているような気が致します。

昔から一部のアスリートを支えているのは一般のスポーツ者であり、その競技人口が多ければ多いほどそのスポーツは強くなってきました。それに付け加え、見る世界でもアスリートを支えている事にも注目すべきでしょう。今後どのように組織を運営すべきか、スポーツ人口をどのように多くしていくか、環境、資金等々考えなくてはいけない問題が山積しています。

いずれにせよ生涯スポーツを広く推し進めそれによって社会に貢献する事がもっとも大切な事であり、失ってはいけない目的、目標である事は確かです。

広報部 二谷 憲行



totoの収益は、身近に親しめるスポーツ環境の整備や競技力向上の事業に活かされます。

加盟団体紹介(33)

高岡市スケート連盟

高岡市スケート連盟は、高岡スケートセンターを利用していたスケート愛好者や県スケート連盟の登録者を中心に、平成5年に設立。同年高岡市体育協会に加盟した。連盟としての活動の歴史は浅いが、以前はスケート場が県内には高岡にしかなかった事もあり、県内におけるスケートの中心は高岡であったと言っても過言ではないと思う。スケート競技にはフィギュア、スピード、アイスホッケーと3つの競技があるが、高岡での主な種目は、フィギュアとスピードであった。なぜなら、県内のアイスホッケー競技は、昭和56年に富山市にリンクが出来た際に初めてクラブチームが発足、さらに高岡のリンクは、施設面で練習や競技が出来なかった事である。フィギュアやスピードに関しては、高岡のリンク施設が充分であったとは言えないものの、平成9年に高岡のリンクが開館となるまでは、年に2、3回、北日本新聞社主催のジュニアスケート教室の開催やフィギュア、スピードクラブの活動があり、普及にもつながっていたと思う。しかし、現在身近にリンクがない事もあり、クラブ員や愛好者も少なく、大会や教室の開催も容易でない状況にある。一方、アイスホッケーは、先に述べたとおり活動場所が富山のリンクであり、クラブチームが発足以来、社会人や学生の競技人口を増やしてきた。そして、平成4年に県内で初の企業クラブチ



ムとして十條製紙アイスホッケークラブ(現日本製紙ペンギンズ)が誕生した。平成5年より開催されている県内アイスホッケーリーグ戦にも参加。二〇〇〇年とやま国体を期に、日本リーグ経験者の参加などあり、徐々に力を付け、現在においても県内アイスホッケー競技の牽引的立場として活躍している。アイスホッケー及びスケート競技は、まだまだマイナーなスポーツであると言えるが、現在テレビでアイスホッケーを題材としたドラマが放映されており、これを期にアイスホッケーの人氣が高まればと願いたい。また、県のスケート及びアイスホッケー連盟と協力し、ジュニア層等対象に、スケート・アイスホッケー教室等開催し、底辺の拡大を目指したい。当連盟としては、現在高岡にリンクがないという悪条件はあるにせよ、これから先もジュニア層や一般の方々に、手軽に楽しめる冬のスポーツとして、スケートを広め、普及活動を行ない、競技人口の拡大につなげたい。今後共、関連各位の御理解と御支援をお願いし、当連盟が高岡市のスポーツの発展と振興に寄与できるものと思ふ。

全国大会初勝利

伏木海陸運送硬式野球部

監督 野村 和 宏

私たち硬式野球部は、一昨年の都市対抗野球大会に続き、昨年も大阪ドームで開催された日本選手権大会へ北信越代表として初出場し、初戦に松下電器にサヨナラ勝ちという大きな一勝を挙げる事が出来た。

昨年度の目標は「都市対抗初突破」という全国大会での一勝に向けスタートしましたが、予選準決勝で北銀クラブに9回2死3点差で勝つていながらサヨナラ逆転負けを喫してしまいました。選手誰ひとりとして油断した者はいなかったが、改めて勝つ事の難しさ、厳しさ、そして悔しさを痛感した瞬間でした。この敗戦を機にチームは変わり、日本選手権の予選では初戦に9回3点差を同点とし延長17回サヨナラ勝ち、続く準決勝でも3点差を同点とし延長15回サヨナラ勝ちで1試合ごとにチームが成長しながら勝ち進み優勝をする事が出来ました。

そして大阪ドームで開催された日本選手権大会。地元から約一〇〇〇人・大阪からも約一〇〇〇人と約二〇〇〇人の大応援団の温かい声援を受け戦いました。初戦の松下電器には、いきなり初回に2点を先制される苦しい展開でしたが、選手誰一人諦める者もなく、すぐに同点とし、その後



また、昨年度の目標は「都市対抗初突破」という全国大会での一勝に向けスタートしましたが、予選準決勝で北銀クラブに9回2死3点差で勝つていながらサヨナラ逆転負けを喫してしまいました。選手誰ひとりとして油断した者はいなかったが、改めて勝つ事の難しさ、厳しさ、そして悔しさを痛感した瞬間でした。この敗戦を機にチームは変わり、日本選手権の予選では初戦に9回3点差を同点とし延長17回サヨナラ勝ち、続く準決勝でも3点差を同点とし延長15回サヨナラ勝ちで1試合ごとにチームが成長しながら勝ち進み優勝をする事が出来ました。

もピンチの連続でしたが選手全員が一丸となり、そして何よりも大応援団の後押しもあって、予選同様の粘りでサヨナラ勝ちし全国一勝の目標を達成する事が出来ました。

昨年の私たちは天国と地獄を味わいました。野球のみならず勝負は最後まで何が起るかわかりません。途中で勝負を諦めたり、安心したり、勝負に対する気持ちを切つては決してよい結果は生まれませんという事を勉強できた一年でありました。

この経験を活かし、企業チームとして仕事と野球の両立の下、今年もまた新たな目標に挑戦したいと思っています。

平成15年度 土曜っ子 スポーツチャレンジ

平成15年度土曜っ子スポーツチャレンジは、5月から7月にかけて第1期「走る・跳ぶ・投げる運動」、8月から9月にかけて第2期「水に親しむ運動」、12月から2月にかけて第3期「ボールとあそぶ運動」が各期6回実施されました。

平成16年度も、本年と同様の活動を計画しています。詳しくは、4月上旬に配布いたします募集要項をご覧ください。

土曜っ子スポーツチャレンジは、スポーツ振興くじの助成をうけて実施しています。